

## 《登場人物》

留守 作 田辺剛

○男  
○女

現代の日本からは時代も場所も遠く離れた世界。荒野の町にやつてきた移動遊園地。舞台はその遊園地を営む社長の、従業員には団長と呼ばれるその部屋。それはトレーラーハウスでもある。狭い室内に社長用の机、その上にはりんごやバナナなどの果物が盛られたカゴと電話機、筆記具などが置いてある。室内にはその他に扇風機、椅子が数脚。出入り口と窓が一つずつある。

興業の最終日。暑い季節の夕方頃。明かりが消された無人の室内。外では賑やかな音楽が流れときおり花火も打ち上げられる。ドアをノックする音が数回。音が途絶えて少しすると窓から中を覗く男の顔が見える。部屋が無人であることを確かめるとその顔は引つ込む。ドアを開ける音。部屋の明かりがつけられて男が恐る恐る入ってくる。室内的熱気と臭気にたじろぐ。窓を開けると外の賑わいが鮮やかになる。男は扇風機のスイッチを押す。机にある果物の一部が傷んで臭いを発していることを知る。痛んだ果物とまだ傷んでいない果物とを何気なしに分ける。りんごはまだ傷んでいない。

男は入り口近くの椅子に座り初めて入る団長の部屋を見回す。何かを待っているように見える。しだいに落ち着かない様子が目立つてくる。立ち上がり窓の外を見たりもするだろう。机のりんごを再び手に取ろうとするところで電話が鳴る。

男は驚き椅子に戻る。電話のベルを聞いた誰かがここへやつて来る

るかもしれない。

男  
……。

電話は鳴り続ける。男はドアを開けて外の様子を見る。誰もいないうだ。しびれを切らした男が取ろうとすると電話は切れてしまう。

男  
……。

男は果物カゴからりんごを手に取る。食欲がわく。汚れを見つけた服で拭く。

ドアから鍵の開け閉めをする音。男は慌ててりんごを床に転がしてしまる。続けて扉が開く音。女が入ってくる。掃除道具と果物などが入った手提げ袋を持っている。

男  
いや……（と部屋を出ようとすると）  
女  
ちよつと（と立ち塞がり臭いに気づく）……ん、なに。

男  
オレは……  
女  
（机に目を遣り）ヤダ。

男  
バナナが。  
女  
（机に目を遣り）ヤダ。

男  
ブドウもだけど臭いがヒドいのは  
女  
食べなかつたのね。

男  
オレは、  
女  
あんたじやない。団長が。

男  
ああ団長か、そうか。

女  
(落ちたりんごを拾つて)触つた?

まあ。

どうして。

臭いが移るといけないだろ。

落ちてる。

それはまあなんだ……丸いから。

窓も？

開けた。

これ（扇風機）は。

空気を……ほら、入れ替える方がいいだろ？

女は扇風機を止める。

どうやつて中に。

開いてた。

開いてた。

鍵が。

かかつてなかつた。

あんたがいるつてことはそうでしようね。

呼ばれたんだ。

団長に。

ここに来いって？

男だから来た……いやオレだつて変だとは思つたけど……ノックはし

たよノック、そうちやんと。けど返事が無いから……窓から中を見て、

窓。

男ちよつとだけだもちろん、団長にもしものことがあつたらつてな、

けど誰もいない。出直してもよかつたんだ……

留守

女は果物の入れ替えをする。

仕事は。

え。

従業員の顔はだいたい覚えてるけど……あんたは……

（気に障つて）ふんつ。

わたしは長いからね、けどうーん……新人？ 案内係……

（舌打ちをする）

女じやない……（男をジロジロ見つつ）料理人……にしては不潔……  
機械技師……あんたの臭いは機械油じやない……警備員？ どつちか  
つていうと追い払われる方だし……まさか事務方……いやあの仕事に  
は知性が必要だからね……あ、動物か。

男芸人だ

女（男のことばが聞こえずに）そうでしょ動物の担当。

男いや……

女ゾウ？ 馬？ 羊？ いや意外とウサギの線もある……

男芸人だ。

男女え。

男芸人。

女ゲイニン？

芸人部屋についてる。

（ガツカリしたよう） なんだ芸人か。

男あんたは。

女わたし？

男あんただつて勝手に団長の部屋に入つてきている。

女わたしには資格があるから。

男シカク？

女の部屋を掃除するの。鍵だつて持つてあるほら（と見せる）。

花火がまた上がる。

約束は？

男 女 約束は？  
何時の約束、団長。

男 女 約束は？  
ペレードが始まる頃だつて。

男 女 ペレードの出発を告げるラッパの音。  
あなたは約束どおりつてことね。

男 女 仕事を放つたらかしで。  
こつちの方が大切だろ。  
こんな一番忙しい日に？

男 女 仕事を放つたらかしで。  
こつちの方が大切だろ。  
こんな一番忙しい日に？

男 よし……よし……（団長との面談を妄想して） 団長……あいや社長

……すみません、いつもの呼び方でいい……けどはい、ここでは正し

い呼び方でお呼びするべきかと……ハハ……やはりいつも最後の日と

いうのは盛り上がるもんですね。こんな小さな町のどこからあれだけ

の人が沸いてくるのかつてね……はじめはこんなところに客なんかい

るもんかって正直思つたもんでしたけど、なんせ周りは荒野が果ても

なく広がつてゐる。道もデコボコだらけ。わたしが乗つた車のタイヤ

がパンクしちまつたほどです。この部屋のタイヤは大丈夫ですか？

そうですよね、こんな立派なトレーラーハウス。ちょっとやそつとで

タイヤがパンクするなんてことはないでしよう。わたしが紹介した、ね、引つ張つて車もたいしたもんです。なんせ団長の部屋ですからね、パンクどころかタイヤに踏まれた岩の方が粉々に潰れてしまうんでしような。ええ……それにもどうですこの賑わい！ オープンの準備のときに見えたんです。荒野の向こうに砂煙が立つて、それが段々こつちに近づいてくる。ありや遠くから客が車で押しかけてるんだつてね……いや社長だつてそのくらいのことはご存知ですわね。大変失礼いたしました……わたし？ ええ、準備の時には動物を洗つてます。ロバですロバ……ずっとロバ洗いの担当でして、はい、わたしは芸人ですよもちろん。芸人部屋についてます。けど芸人つても客の前に出るまで特段することはありませんからね、それで朝の準備ではロバを洗うようつて……

男は机のりんごを手に取りかじる。

男 はて……誰に命じられたか……ああそうだ、先輩に言われたんでし

た。お前は……お前つてわたしのことですよ、お前は動物みたいな臭

いがするからそつちの方の手伝いでもしてたらいいんだつてね、それ

で訪ねたんです動物小屋をね。そこにいた爺さんに連れてこられたの

がロバの前……あの爺さん、えーっと、ほら、覚えてらつしやいます

か、馬に蹴られて死んじやいましたけど、大砲の弾みたいに吹つ飛び

ましたよ。ドーンつてね。馬の蹴る力つていうのはスゴいもんだなつ

てわたしや驚いたもんですハハ……あすみません余計なことを……今

日お呼びになつたのはやつぱりアレですか……いやわたしは良く見て

ないんですよ。芸人部屋のケンカはしょっちゅうですからね。飛んで

くるモノに当たつたらたまつたもんじやないですから近づかないよう

にしてるんです、だから……あの日だつてケンカが始まつた前に外へ出

ました。気配で分かるんです。ええ、メイクをしてたところなんですよ

がね、道具ごと持つて……鏡が欲しかつたから女たちのどこに行こう

かとも思つたんですが……ハハ冗談ですよ冗談……便所です便所になりました。樂屋のほかに鏡があるのはあそくくらいですからね。悲鳴が聞こえたもんで戻つてみれば、ほれ、あのでつかいデブが仰向けに倒れてたつてわけで……（大きさを示して）このくらいの……そこそこのナイフなはずですが、あいつの胸に刺さると、小さな十字架みたいでしたね。犯人があのヒヨロヒヨロだつて聞いてさらに驚きましたよ。よくやるもんだつて。逃げたらしいじやないですか。車盗んで。だからわたしは……これは誓つて申し上げますが、そのケンカにはまつたく関わつていません。もつとも……え？ 違う……ハハ、わたしやつてつきりそのことで呼び出されたのかと……参つたな……じやあいつたいどうして……

（戻つて）本当に呼ばれたの？

男 （我に返つて）え。

女 あんた。団長に。

男 もちろん。

女 けどおかしいじやないか。団長はいつも……この時間は隣町に出かけてる。この近くにもいない。聞いてみたんだよたつたいま、受付の連中も見ていいないって。あんなに目立つ人、気づかない人なんていなからね。そうだろ。

男 そんなことくらいオレだつて分かつてる。

女 （机のりんごがないことに気づき）あれ？

女 机の周りに落ちていなか探す。

男 これ……（とかじつたりんごを見せる）

男 あんた……

女 いやちよつと魔が差しただけなんだ。

女 は表情がこわばり急に退出しようとする。男は察して行く手を

阻む。

男 違う違う。

女 いまここを通してくれば大きな声は出さないであげる。一〇分。一〇分外で待つていてあげるから静かに出て行きなさい。もちろん何も持つていかないで。だいたいここにお金はない。

男 盗みに来たんじやない。

女 分かつた。りんご。床に落ちたりんご。お腹が空いていたのね。果物はどうせ取り替えるんだから、りんご一個ならわたしがごまかしてあげる。なんていえばいいかしら……わたしが間違つて小さなお客様のところに転がしてしまつて「これちょうどいい」って言われてついあげちゃつたつて……

男 オレは芸人だ。言つただろう。

女 泥棒といつしょでしょ芸人なんて。通して。

男 寺劇してるんだ。

女 は。

男 どつちかつていうと役者だ。芸人というより。

女 ヤクシャ。

男 大道芸の後がオレの出番だ。

女 あんた、役者は芸人よりマシだつて言うんだね。

男 ほらそう……この前の町、海のそばにある……嵐が来て何日も休

みになつただろう。あの時に採用されたんだ。嵐が去つても辺り一面水浸しで、大道芸もオレたちの寸劇もお預けに。そうさ、ずっと水かきの仕事をさせられたからな。だからお披露目はここに来てからだ。あんたがオレを見たことがないのはそういう理由だ。みんなバタバタしてただろう。

女 たしかに水はけの悪い場所だった。

男 はいてもはいても水たまりがなくならない。

女は窓の外を従業員が通りがかるのに気づく。

女 （窓の外に向かって）ねえちょっと。（相手を認めて）……いいとこ  
ろに来てくれた。この人知ってる？（男に）ほら。

男も窓際へ寄る。

やあ。

男 芸人だって言うのよ。あなた芸人部屋によく出入りしてるでしよう。  
男 もちろんだ。彼にはいつもよくしてもらってる。このあいだだって  
怪我の手当をしてくれた、な。

外の人物がなにか喋っているようだ。

男 ほら。  
女 そう……

男 （外の人物に）ありがとう。お前もこっちに来ないか。団長の部屋。  
入ったことないだろ。オレも初めてなんだ。外から見るとボロボロ  
のトレーラーハウスだけどな、中はほら、しっかりしている。

女 勝手に入れないので。

外の人物は去ったようだ。

男 またな……どうだ聞いたか、オレは泥棒じやない！ここれつき

とした従業員で芸人部屋についている。

女 この部屋の主みたいな威張りよう。

男 りんごは、ま、ちよつといただいてしまったが、その他になにもや  
ましいことはない。後は団長がここに来さえすればすべてがはつきり  
するというわけだ。あんたの思い違いだつてことがな。

女 何の話。

男 え。

女 団長との話つて、なに。

男 それはまだこれからだ。

女 大事なこと？

男 きっとそうだろう。新人にしてはよくできるから給料が上がるの  
か、もつと偉い役目をおおせつかるのか。

女 じゃあ出ていいって。

男 は。

女 団長が来るなら、来そうにもないけど、わたしの仕事を済まさない  
と。

男 いたつていいだろ。

女 出ていつて。人呼ぶよ。扉の前で待つてればいいじやない。幸運に  
もそこで団長が現れたら、わたしのことを言ってもらつていいわ。団  
長のお部屋にいま掃除が入つてますってね。

男 が部屋を出ようとすると電話がなる。

男 さつきもだ。

女 さつきも？

男 それを聞いてあんたが来たのかと思った。

女 なんだつて。

男 なにが。

女 電話。

男 オレは出でない。そんな勝手ができるわけない。

女 ……。  
男 ……。

女は電話を取る。

留守

女 ……はい、わたしです……掃除の時間ですか……（男を見て）ええ、います。今日お約束をなさったとか……ずっと待つておいでですよ。

鍵が開いていたとか……はあ……いまだどちらですか？……そうですか。代わりましょうか……ええ、はい、そのように伝えます……はい……え、どんなご用件でしよう……はあ……分かりました……はい……（と電話を置く）

男 ……団長か。

女 次の町にいるんだって。

男 次の町。

女 本当かどうか怪しいもんだけど。

男 次つて大きな町じゃないか。

女 帰るから待つておくようについて。

男 団長が？

女 そう。

男 待つておくようにな?

女 そうね。

男 やっぱりな、オレは間違つていない。

女 出ていつてくれる? 掃除しなきや。

男 新しい服に着替えてこよう。わざわざオレのために帰つてきてくれるんだからな。こつちだつてそれなりの準備が必要つてもんだ。

女 いいわよそのまで。

男 あんたはあんたの仕事をすればいい、オレにはオレの仕事がある。

女 ……。

男 残りはやるよ。

男はかじつたりんごを自分が座っていた椅子に置き、意気揚々と出ていく。

部屋の掃除が終わってしばらく後。部屋には男が一人、椅子に座っている。男の服は変わっていないように見える。ニヤついて妄想にふけっている。

外のパレードは終わり日も沈んだ。遊園地の営業は続いている。

男 (団長との面談を妄想して) やめてください、わたしなんか無理に決まります。もつとふさわしいヤツがいるでしょう……まあすぐに思いつきませんが……あのほら、お手玉するメガネ。あれなんかどうです。あいつは東の出身だっていいますからね、ちょっとノロマなところはあります。頭は賢い……え、そなんですか。見えないなあ……ダメですか……だつたらイヤを持ち上げるあいつがいます。腕つぶしでの怪力にかなうヤツはいません。それにああ見えて曲がったことは嫌いですからね、でしょ? ……まあ確かに、はい、ことばの問題はあります……ええわたしにもさっぱり、あれはいつたいどこの国のことばなんですか……仕切るヤツのことばが誰にも分からなければ役には立たないでしようね……しかし(笑みを隠しきれず)……わたしに務まるでしようか。芸人部屋のなかでは新人ですし……自信がないってわけじゃないですよ……わたしだってビシツと言うときには言います。そのくらいの度胸は持ち合わせてますよ……いつたいわたしに人の上に立つということが……死んだ母親が聞いたら驚きのあまりもう一回死んでしまうでしようね……どうしたものか……そうですが、団長……あいや社長。社長がそこまでおっしゃるならここはひとつ……

ドアを開ける音がして男は我に返つて咳払いなどする。

留守  
男女  
え。  
(現れて) 誰?

……  
女 独り言?  
男 なにが。

女 なにか話してたでしょ。

男 いや……  
女 なにが。  
男 なにか話してたでしょ。

女 は椅子に座る。服が着替えられている。  
外の音楽が室内の沈黙を強調している。

男 ん。  
女 え。

二人はただ座っている。

男 ……掃除か。

男 そうだな。  
女 終わったわよ。

男 そうだな。  
女 (部屋を見回して) 見違えるように。

男 そうだな。

女 ゴミが落ちていないのは当たり前。きれいかどうかってことは問題じやない。調度品の位置も正確に整えている。ほらこの椅子、少し斜めになつているのが分かる? (椅子を机に正対させて) 机に対して真つ直ぐじやない。(椅子を机に対しても少し斜めに動かして) こう。こううじやなきやいけないって。

男 それは団長が決めるのか。

女 わたしが決めたの。世界を旅する遊園地の社長だもの、その部屋だって威厳というものがないといけない。外からの見てくればボロボロでもね、中は別世界のように。

男 団長もさぞ気持ちいいことだろうな。  
女 (床に落ちたりんごの芯を見つけて) あ!



男 ああ始まるんだな。オレの代役……若い才能を信じよう。初舞台が

オレの代役っていうのは荷が重いだろうが仕方ない。せめて芝居を台無しにするようなことにならなければ、そう、それでいい。若いヤツ

らには未来がある。多少のことなら乗り越えていける。かといってあまりにうまくいきすぎると、それはそれで本人のためによくない。それが難しい……。

女が戻る。

男 (床を指して) どうだ。  
女 . . . 。

男 女  
オレは毎日動物小屋の掃除を手伝つてゐるからな。  
戻ってきて。出て左に置くところがある。

男がモツプを持って出て行く。

女は大きなため息をついて椅子に座る。外の音楽が室内の静けさを強調している。やがて男女の抑えた笑い声が戸外にやつてくる。窓のすぐ向こう側でキスをする音、そしてまた抑えた笑い声。なにか話してもいるようだ。

男の声  
なにしてるんだ、仕事しろ！

戸外の男女は逃げたようだ。

男（現れて）サボつてやがった。分かつたか？ そこ（窓）から見え

留守女いや

男 男はあいつだ。運転手。この部屋を引っ張る車の、  
（察しがついて）ああ……

男 女 車を新しくしてそれで自分も偉くなつたと勘違いしてゐるんだ。  
若い男の子はそんなもんよ。

男 女 自分の車でもないのに。  
だんだん分からなくなるのよ。他人のモノと自分のモノとが

女 新人はあなたでしょ。ここにいる人間の顔を全部知るには時間がかかる。(と椅子に座る)

**男** 本当はこの部屋を新しくしたかったらしい。けどなんせからな、まずは車の方からって、前の港町で調達したんだ。

男 女  
どうだ。  
(ため)

男 女  
床。 たにか

男 女  
まおいんしゃない  
そうかよかつた。

短い沈黙。

女 男  
は。 なんだ。

男 まだなにかかるのかオレがすること。

男 じやあ出て行つてくれ。

男 女  
掃除をすればあなたの仕事は終わりだろう。ここにいる理由はない。  
……。  
それとも団長が来るまで話し相手にでもなつてくれるというのか。

まあそれはそれで悪くはないが、オレはいま練習をしているんだ。

女 練習。

男 団長との交渉さ。仕事の責任が増えるとなればそれに見合う報酬っていうものが必要だ。オレの生活がかかつてゐるからな。団長に言われるまで黙つてゐるわけにはいかないだろ。何を言われてもすぐに返事ができるようにならぬ。しかもだ。交渉つてのは「はい」か「いいえ」で済むことじやないからな。機転をきかせなきやならない。港で荷物運びをやつてたとき、船主とオレのボスが交渉しているところを何度も通りがかつた。粘り強く、けど相手を怒らせてもいけない。時には話をズラしたり、少し遠回りをして元の話に戻ることもある。その練習だ。待てよあんたに団長の代わりをしてもらうのも……

女 呼ばれたの。

男 わたしも呼ばれたの。

女 呼ばれた?

男 誰に。

女 団長よ。

男 あんたも。

女 だからここにいる。

男 どうしてあんたまで。

短い沈黙。

男女 服え。

女 着替えてくるつて言つたじやない。  
男 ……着替えたよ。

男女 留守。  
女 え。  
男 うだらうな  
女 だからなにやつてんのさ。  
男 言つたじやないか?  
女 は。

男 着替えた。  
女 同じじやない。

男 フン、まるで違うじやないか。

男 どう違うの。

男 どう見たつて綺麗だこっちの方が。  
女 ……そうかもね。

男 オレに話があるつてことは分かつてゐる。けどあんたは……だいたい順番だろ。呼ばれたのはオレが先だ。その辺りで待つていればいい。オレが知らせてやる。交代だつてね。見えるところにはいてくれよ。

銅鑼の音。

女 なにをやつてるの。

男 は。

女 役者なんでしょ。何の役?

男 寸劇いまちようどやつてゐるところじやない。

男 (大きなため息をついて) 役者つていうのは不思議な商売だ。オレも団長に見初められるまで、自分にそんな才能があるとは思いもしなかつた。港で船に荷物を運んでいるオレを見てだよ、「ちよつときみ」つて声をかけてくれたんだ。あの人はスゴい人だよ、ダイヤモンドを見ていた。ダイヤモンドと言ふ人間はたくさんいる、いや、誰もがそうだ、けどあの人は違うんだな、ただの石ころを見てそれがダイヤモンドになることを見抜く力を持つてらつしやる……自分の人生がそんなことになるなんて……いや……があ想像したことがあるか?

男  
ダイヤモンドだ。

ダイヤモンド。

……になるところの石ころ。

文  
集

卷之三

石ころだ。

イシコロ?

そう。

石ころの役。

۱۰۷

九三

動物だけじゃない、動物たつてマジックたつて寸劇たつてやつてる。

その中でも素人には分からぬような仕事や裏の役目っていうのもたくさんあるんだ。

男 女  
けど石ころって人じやないでしょ。  
当然だ。石ころだからな。

女  
それを寸割で?

支那の文化

男 そふた

女 けど石ころなんてどうして？ あつてもなくとも同じじゃない。

男あんたいいことを言つたな。そこが大切なところだ。

女  
は  
あ

男  
オレはあの舞台で石ころを演じている。ここからはちよつと見えな

いが、あのテントが邪魔だ。とにかく舞台だからな、みんなが舞台を

見て いる。 けれども そ う、 あんたが 言うとおり、 舞台には いる。 けど

誰も気にしない。いるけどいいのと同じ。それが石ころだ。

女 台詞は？

男女古今之言也。

男あるわけないだろ！

女 ゴメンナサイそうよね。

男 石ころがしやべり出したら目立つて仕方がないじやないか。そんな

の台無しだ。ああ……オレは芝居のことをペラペラしゃべるのが嫌いなんだ。なにもかも分かったような顔をして。いるだろそういうヤツ。

女 じゃあなに、ジツとしてるつていうの、本当の石ころのようだ。  
男 フンツ。舞台でなにかしなくちやいけないと思ひ込んでるヤツはもう役者じやない。ただの出たがりだ。なにかする必要はない。ただいる、それだけで十分。だからこそ石ころなんだ。  
女 お話を必要なの。  
男 あんた観たことないのかいまの新作。  
女 まだね。  
男 だつたら楽しみにとつておいた方がいい。  
女 いいじやない聞かせてよ。劇の結末を知つたところでわたしは冷めたりしない。  
男 だからオレは芝居の話が嫌いなんだ。  
女 南の国のお話しだつたかしら。  
男 北だ。北の王様。  
女 北の王様……  
男 そう、家来にも息子たちにも裏切られて國を追放される話だ。吹雪の強い夜にロバを一頭与えられただけで城を放り出されるんだが、とにかく風が吹かない方へ行こうとする。しばらくして振り返るんだ。遠くに見える我が城は真つ暗な空の下で煌々と輝いている。ああ、どうして自分はこんな運命になつたのかどこで間違つたのか……王には分からぬ。ただやり場のない怒りと情けなさがとめどもなくこみ上げてくる。ロバが鳴く。風と雪が顔を打ち付ける。王は悔しくてたまらない。涙もとめどなく流れてくる。そこでヤルんだ。  
女 ヤルつて？  
男 跛飛ばすんだよ、そばにあつた石ころを。裏切り者たちのところに……そう、せめて一撃でも食らわしてやれたらつてね。けど跛飛ばした石ころは遠い城に届くはずもなく、そりやそうだよな、近くの茂みにコロコロと転がつて消えていくだけなのさ。そうして王はロバに引つ張られるように歩いて行く。どこへ行つたかは誰も知らない。

男 ああ、つい話してしまった。けど分かるだろ、最後の場面。王様が

蹴飛ばす石ころがそこに無いとしたらどうだ。締まらないだろうお話

しが。すべてこの場面に向かっているんだからな。

女 やつてみて。

男 は。

女 あなたの役。

男 男 男

女 そう、どんな感じか。

男 おいおい。バカにしてるのか。役者っていうのは……フンつ、手品

師じやあるまいし。パツとやつてみせろってそんな……

女 わたしがここに入ったのは二十歳を過ぎた頃だつた。当時からいろんな出し物があつたわ。手品、マジック、歌、踊り、大道芸と芝居も。

いろんなものをたくさん見た。そしてなぜだかわたしがいいといつた芝居なんかは大当たり。すると一気に客が増えたりね、本業の遊園地よりも芝居の方が評判になつて団長は困つていたわ。それで頼りにもされていた。団長は忙しいからわたしがアドバイスをするの。あの役者は使えるとかあのマジックは新しいとか。だからあなたの役者としての才能がどれほどのモノか見ることができた。団長の好みだつてあるけどね、それも含めて……まあ、だからちよつとやつて見せてよ。

ねえ……

男は静止しているように椅子に座つたままだ。

女 果物食べたこと、大目にみてやつたでしょ。

女 聞いてる？

男 男 女 男 女  
女 やつてるだろ！  
え。

女 じやあ……  
男 （椅子に座つて静止している）  
女 「ああ……アレ、ハ（字が小さくて読めない）、あれは！ クラ……クラ、ヤ……暗闇にともされた口、ウ、ソ、クの明かりのように見え

沈黙。

女 いま……これ？

男 ダメだ……ちょっとあんたこれ。（とポケットから紙を出す）女 なに。

男 （紙を渡して）読んでくれ。芝居は一人じゃできない。相手役あつてこそだからな。

女 小さな字！

男 一番上からでいい。

女 台本これ？いつも持つてるの。

男 当たり前だろ。北の王様の台詞だ。

女 北の王様……

男は扇風機をまわして女に向ける。

女 なに。

男 吹雪だつて言つただろ？ 吹雪の夜だ。とてつもなく寒い……（女が扇風機に背を向けるので）おいおい。

女 え。

男 そつち（風が吹く方）を見るんだ。

女 寒いんだけど。

男 寒くない。追い出された城は風上にある。

短い沈黙。

留守

男 男

女 女  
いいわよ。

女は台詞を言うだけで蹴ろうとしない。

男 ……（姿勢を変えず）蹴るんだ。

女

「えいつ。」

女は男に寄る。台本にはそこで男を蹴るように書かれているが女は蹴らない。男は手で自分を蹴るよう合図する。

女 「（側にロバがいるついで）ああロシナンテ。泣くでない我が駄馬よ。さあ行くことにしよう。夜の闇も冷たい風もずっと追いかけてくるわけではない。南へ。そう、南へ（と手綱を引こうとするがロバが抵抗している）……そうだ、こっちだ……」

馬の鳴き声。

男 ルニ……（咳払いして）その光は人民が夜に飲み込まれてしまわないよう、そう、それはまさに我が國の希望そのものなのだ。けれどもその希望はここまで届かない。わたしはすっかり遠くへ来てしまった。ああ、どうしたことだろう。長い冬に耐えられない……（扇風機の風に震える）……耐えられない太陽に代わってこの大地を守るのがわたしの使命。わたしは誠実に務めてきたではないか。それを不実な息子たちの謀略によつて奪われてしまった。いや、奪われたのはなにより人民の生活ではないか、そう、わたしの運命などはどうでもいいのだ。ああ寒い、雪や風もわたしを城から追いやろうと打ち付けてくるのか。敗北か、これは敗北なのか」

男 ドラマの脚本家である。彼は、この物語を書いたときに、必ずこの台詞を頭に置いていた。それが、この物語の核心となる。それは、人々が、自分の命を守るために、何を犠牲にしてもいいかぎりに、戦うことを決意する精神である。それが、この物語のテーマである。

男 どうして。女 どうしてつてだつて……  
男 蹴らないと。女 人を蹴つたことがない。  
男 芝居だろ。女 芝居つて……

男 男は蹴られたついで勝手に椅子から転がり落ちる。女は驚く。

男 沈黙。外の音楽が響いている。

男 男が静かに起き上がり女を見る。女も男を見返して二人は見つめ合うようになつてしまふ。男が咳払いをして椅子に座り少しうつむく。女も緊張がほどけてロバを引く手綱の手をやめる。

女 （紙切れを渡して）これ……  
男 よくできた台本だ。もちろん団長が書いた。あの人はたいした作家先生でもあるんだな。続編があるらしい。南へ向かつた王様がサーカスの一団と出会う話だ。

女 わたしたちはクビになるのよ。

外からはゾウの鳴き声と歎声。男は扇風機を止める。

女 もつと早くに言つてあげた方がよかつたかもしれない。今日がこの町の遊園地は最後の日。明日は次の町へ向かうでしょ？ あなたが前の港町で声をかけられたように、団長は次の町での興行のために新しい才能を見つける。新しい人が加わった分、古い人間を置いていかなきやいけない。車の席には限りがあるからね。最近は自分で勝手に辞める者が何人かいたから団長がわざわざクビにすることはなかつた。男 芸人部屋で殺されたでつかいのと殺して逃げたヒヨロヒヨロで二人分の席が空いてるはずだ。

女 だからそう……新しい人間がもつと入るつてことなのよ。その二つの席では足りないくらいにね。

男 誰だ新しいヤツつて。

女 知らないわよ。

男 けどオレはほら……今夜の団長の話で芸人部屋の仕切りを任されることになる。まあ確かに、給料をいくら上げるかで多少はもめるかもしれない……だから交渉……けどそもそもオレっていう人間は金にはそんなにこだわってないんだ。まさかそれだけの責任を負わされたのに減るっていうことはないだろうからな。大切なのはそれがオレにふさわしい仕事かつてことだ。よく考えたよ。オレにそんな責任を果たす力があるのかって、だつてただの荷物運びだつたオレがだよ。芸人

部屋はクズどもの集まりだ。殴った殴られたは朝昼晩、盗んだ盗まれたは三時のおやつみたいなもんだ、さすがにこのあいだの殺しは久しぶりだと聞いたがね。そんな猛獣よりも猛獣なヤツらをまとめることができるんだろうかってね。考えた。けどオレは引き受けると決めたんだ。

女 いつ言われたの。

男 なにが。

女 その話、部屋を仕切るつていう……

男 まだ。

女 まだ？

男 団長が折り入つて話をしたいっていうんだ、あの団長がだぞ、そういう話に決まってるだろう。

女 わたしたちはクビになるのよ。

男 そんなわけない。あんただつてまだ聞かされたわけじやないだろう。どうして分かる。

女 出発の日の朝だと何かと遅すぎる。荷物だつて自分のをまとめなきやいけない。他の人のモノとごつちやになる前にトラックから引っ張り出さなきや。そうでしょ？ けど遊園地をやつてるまつ最中だと早

すぎる。クビだからって仕事があるのに急にいなくなるわけにはいかない。給料を棒に振つても構わないなら別だけど。だからそう……従業員をクビにするのはいつも決まってこの最後の日の夜なのよ。

電話が鳴る。

女 あなたはまだ知らないでしょ。わたしは知つてゐる。

男 ……。

女 わたしは知つてゐるよ。(と電話に出る) ……はい……わたし？ わたしは掃除の係ですが……はい、団長はいま外出中……

男は電話の相手が団長でないことを知ると外に出る。

女 はあ……えわたしですか、ですのでわたしは掃除係として団長の部屋をいま……ええ団長がいらっしゃらない時は代わつて電話の対応も14

こうして……いえ、そういう者では(と相手の怒鳴り声に受話器を少し遠ざける) ……(息をついて) お嬢さん落ち着いてください。よろしいですか、団長はいま大きな町に出かけ……あ、でしたらお分かりだと思いますがいまこちらに向かっているところで、すぐにはたどり着かないと思いますよ。いつまでご一緒にいらっしゃいました? ……はい……だつたらまだまだ時間が……あの……出すとか出さないの話ではなくまだ……隠してません……わたしはただの従業員で……ああお嬢さん泣かないで、ほら、泣いてると団長に嫌がられるでしょ。そ、あの人は誰にでも言うの。従業員だけじやなくね、いつも微笑んでいるようつて。まるで人形が……(急に電話を切られて)あれ? もしもし……

女は苦笑する。外では爆竹が鳴つてゐる。

14

男 (戻ってきて) まだだ。このくらいの時間になるとこっちへ向かう車があれば遠くからでもすぐ分かる。ヘッドライトの明かりが見えるからな。日中は巻き上げられた砂煙を探すしかないから難しいんだ。けど……

女 すぐには帰つてこない。

男 どうして分かる。

女 いまの電話で。

男 団長じやないんだろう?

女 一緒にいたつていう人。

男 誰。

女 知らないわよそんなの。ついさっき出たばかりのようだから。

男 そうか……だいたい本当に戻つてくるんだろうな。

女 ここに戻らなくてどこに行くつていうの。

電話口から椅子に戻ろうとする女が男の側を通り、男は女の頬に手を伸ばす。

男 おい。

女 なに。

(身を引いて) なに。

男 食べたか。

女 食べたか。

男 さつきのバナナ。オレが皮をむいたえ。

女 食べるわけないでしょ。傷んだら捨てるになつてゐる。(女の頬を指して) バナナのすじ。

女 は頬についたバナナのすじを取る。

男 何かを食べて初めて腹が減つていたことに気づく。ずっと食わなきや忘れたままなのにな、からだが思い出すように気づく。腹が鳴るのはむしろ食べてしまつてから、どこから湧くんだけてほどの食欲があふれてとまらない。だつたらずつと食べなきやいいんじやないか。食べるなどをやめてしまえば、もうどうやって食べるかなに食べるかを考える必要もなくなる。しかもな、それを客に観てもらうのはどうかつてね。みんな驚くに決まつて。何も食べない人間つていうのはどういうヤツなんだ、いつまで食べないでいられるのか見てみたいはずだ。尊敬すらされると思うね……(部屋を出る女の背中に) 誰にもいいやしない。

女 は部屋を出た。短い沈黙。

男 まあけど、ひもじいのは辛いな。

外ではダンスパーティーが始まるようだ。

男 腹を空かしてない連中がなにかと踊りたがるんだよ。

歓声が聞こえる。

明かりが消された室内。机のバナナはすべてなくなっている。男は窓際にいて外のダンスバーティーを楽ししそうに見ている。男  
踊つてゐる誰かを見つからかおうと指笛を吹く。

男 ハハ……なにを驚いてる。踊れよ。

男の笑顔が落ちるように消える。  
ドアを開ける音がして明かりがつく。女が入ってくる。旅に出る  
格好をしている。

男 女 あんたは踊らないのか。

オレもダメなんだ。人前で何かやつて見せるんだつたらできる。小さい頃からそう、目立つのが好きなガキだった。踊れと言われば踊るし歌えと言われば歌う。うまいわけじやない、逆だ。メチャクチヤなんだ。それを見てみんなが笑う。馬鹿にされてるぞつて教えてくれる友だちもいたけどな、確かにそうなんだろう、けどオレは構わなかつた。みんながオレを見ている。それがなにより大切なことなんだ。（窓の外を指して）けどああいうのはダメだ。あいつらは見せるために踊つてるわけじやない。ただ楽しいから踊つてるんだろう、いやどうちだ、踊つてるから楽しいのか。

男 (笑つて) ハ、そうだ。けどあいつらは見られてることを知らない。  
自分たちの世界のなかにいるだけなのさ。まあオレもあんたも歌や踊  
りとは縁のない人種なんだなきっと。これまでもこれからも。

留守女できな  
いなんて言つてない。

女 男 女 男  
：：： 踊るのか。  
歌。 多少はね。

男 女 男  
歌。 三 踊るの  
歌

短い沈黙。

男  
ちよつと。

男  
ちよつと。

男  
なんでもいい。

男 たとえ下手でも笑いはしない。そこは信用してもらつていい。

どうして歌わなきやいけないのよ。  
オレだつて芝居してやつただろう。  
アレのどこが芝居なのよ。

おいおい冗談じやないぞ。  
ジツとしてただけじやない。  
石ころの役なんだから当たり前だろ。

いいじやないか。

男 あんたが本当に歌えるなら団長に掛け合えばいい。わたしは掃除だけじゃない歌えますつて、クビにする必要なんかないって……歌い手もちようど足りないんじやなかつたかいま。なんならオレが口添えしてやつてもいい。なかなか見込みがありますよつてな。

いいわよ口添えなんて

意味がないから。

留守

男 どういうことだ。

女 あんたも早く荷造りしなさいよ。

男 オレはクビになるなんて信じてない。どう考えたっておかしい。理由がない。採用されたばかりだし寸劇の役だつて立派にこなしてる。

みんなそう言つてる。

女 自分には分からぬ理由があるのよ。だからクビなの。

男 あんたは諦めが早い。確かめてからでいいじゃないか。すっかり出

ていく準備が整つていて。

女 (バナナが無くなつていて) また食べたの?

男 これだけ待たされてるんだ。もういいだろう。ダメだつて言うなら

なら給料から天引きしてもらえばいい。上がつた分が少し削られるく

らいどうつてことない。

女 まだそんなこと言つてる。いい話に違ひないつて? どうしてそん

なに頭が悪いの。

男 そうだ、ひとつ団長に提案してみようか。あんたの歌とオレの芝居

を合わせた新しい出し物を考えるんだ。そういう類いのものはないだ

ろう? いいじやないか。あんたが何を歌えるのかにもよるけど。

女 ねえ、しばらくしたらダンスもお開きになる。

男 何言つてんだ。朝まで続くパーティーだぞ。

女 帰る客もいるつてこと。ほんどの人間は月曜の朝になつたら働か

なきやいけない。

男 ざまあみろつてんだ。

女 ほんとに口が減らない男。

男 団長との話がもう済んでるなら、いまごろは飲み残しの酒を頂戴し

て機嫌良くやつてるところだ。あんたの言うとおり、帰り始める客が

いるからな、うまくいけばおごつてもらえることだつてある。

女 その客にあんたからもお願ひして欲しいの。

男 あんたの分も?

女 酒の話じやない。ねえ、港の町まで帰る客を見つけるの。その車に

わたしたちも乗つけてもらわないと。

男 どうして。

女 クビになつても団長にお願いすれば次の町まで連れて行つてくれるかもしれない。けどわたしが行きたい方向とは逆。

男 港の町へ行つてどうする。

女 港から船に乗る。

男 どこへ。

女 故郷。

男 あんた、海の向こうの出か。

女 分かるでしょ? 女が一人で港まで行くのがどれだけ難しか。

男 だからなんだ、オレについてこいつていうのか。

女 港の町で荷物運びをしてたんでしょ? ちょうどどいいじやない。た

とえ次の町まで連れて行つてもらつてみんなとはそこできよならな

のよ。なんのあてもなくどうやつて生きていいくつもり?

男 だからオレはクビにならない。

女 (ため息)

男 本当にクビになるんなら行つてやるよ。

女 それを確かめる余裕はないの。

男 ……。

女 もしあんたが期待してるみたいに、なに、芸人部屋の仕切り? そ

んな大きな役目を任されるならとつに伝えられてるはずでしょ。だ

つて明日は移動の日なのよ。テントをたたんで掃除して、メリーゴーランドから小さな動物までベテをトラックに積み込まなきやいけない。部屋の仕切りをする人間がどれだけ大変かあなただつて見てるでしょ。準備がいるのよ。それにやることが多いだけじやない。急いでやらないとまた団長は不機嫌になる。部屋の仕切りをさせるならモタモタさせないためにも早く言わなきや。電話でも十分。

二人は電話を見るが電話は鳴らない。

男は部屋の外へ向かう。

女 クビを言うのは簡単。「一言、「お疲れだつたな」。団長の決まり文句。  
誰もがその一言に怯えている。悪い呪文のようにな。

男は外の様子を伺つているようだ。

女 誰か来る気配はある？ 仕事が終わつた従業員は明日のために休む  
かダンスパーティーに加わるか。そのどちらでもない誰かがここに来  
る様子はある？

男は戻つてくる。憮然としている。

女 分かつたでしよう。勘違いしないで。ここから逃げようっていう相  
談じやない。自分たちから出ていくの。

男 どうするんだ。

女 あんたも荷物をまとめて。  
男 荷物なんてない。

女 だつたらパーティーが終わるのを……

ドアをノックする音。

動けない二人。

再びノックする音がして男が外へ出る。

男の声 なつて団長に呼ばれたんです。それで待つてる……え、けど  
団長が……そうですが……はい……これもですか……はい

男が戻る。

男 パンクの修理。  
女 パンク？

男 ここに来るとき乗つっていた車のタイヤがパンクしたんだ。道がヒド  
かつただろう？ オレが乗つてた車だけじゃない、他の車も大丈夫か  
見て回れって。この（部屋）下のタイヤも一本やられてるらしい……  
女 これも？（と床を見る）

男 特にこいつがな（と床を踏みならす）。タイヤが大きいから一人でや  
るのは一苦労だ。  
女 終わる頃には朝になる。  
男 それが明日出発するためのオレの仕事だ。  
女 どうしてあんたはそんなに素直なの。  
男 素直って、言われたからやるだけだ（と部屋を出ようとすると  
女 どこに。）

男 こここのタイヤを見てみる……  
女 修理したつてあんたは一緒に行けないのよ。

短い沈黙。やがて窓の外から男の声が聞こえる。

男の声 ああ、これならそんなに手間取らないな。

女 （窓により）……だつたらあんた、はじめにそこのタイヤをなんと  
かしなさいよ。でね、修理が終わつたら運転手のところに行くのよ。  
出発前に車がこの部屋をちゃんと引っ張れるか少し試してみたいつて。  
鍵を貸してくれつて。そう、わたしすっかり忘れていた。この部屋が  
動くお城だつてことをね。城を置いて行く必要はない。城といつしよ  
にここから去ればいいのよ。で、運転手が渋つたらこう言つてやるの、  
さつきそこで新人の女の子とイチャついてたんでしょ、だからね、「お  
前は団長が嫌うことを知つてゐるか、一つは動物の餌やりを忘れる」と、  
一つは机の上の果物が傷んでいたり足りなかつたりすること、もう一  
つが仕事中に男が新人の女の子に手を出すことだ」ってね。きっと縮

み上がるわ。それでうまいことを言つて車の鍵を手に入れられたら、他の車を探す必要がなくなる……（部屋を見回して）いいのよ……わたしがここに入つたばかりの頃はこんなに大きな集まりじやなかつたから、この部屋だつて団長の部屋じやなかつた。みんなで使つてた。

フフン……わたしがこれを選んだのよ。新しいトレーラーハウスを買ってみんなで寝泊まりするからつてトレーラーハウスがたくさん売つてるところ、果てが見えないくらいに広かつた。誰だつたかしらもうやめた人だけど、その人が選ぼうとしたのがずいぶん大きなモノでも広くて豪華だつたけど、お金も足りないし、そのときのわたしたちの車では馬力が足りなくてその部屋を引っ張れない。みんなどれにしようかつてまとまらない時にわたしがこれにしようつて、一番若い、幼いといつてもいいくらいの小娘が言つたの。離れたところにあるこの車に駆けていつて中から、こうしてね、顔を覗かせて団長に手を振つて見せた。だつて他は団体がデカいだけか、角張つて古くさいものばかり。これが丸つこくて可愛かつたから。ただみんなが寝るには狭くて、それは後で後悔することになるんだけど、反対する人もいた。さつきのもうやめちゃつた人もね、けどわたしはこれがいいつて言ひ張る。そしたら団長、「じゃあこれはお前へのプレゼントだ」って決めたのよ。それがこの部屋。車に引っ張らせて世界を旅したの。

男が戻つてくる。

女 つい最近の話なのよ、ここが団長の、なに？ 「社長室」になつたのは。けどもともとはそう、わたしへのプレゼントなんだから、いいのよ。文句なんて言わないわ。そもそもある人が何か言う頃にはそんなことばが届かないほど遠くへ行つてゐる。

男 やつたことがない。

留守

男女 運転。

女 ……本当に役に立たない人。

男 やつたことがないつて言つただけだ。できないとは言つてない。

女 港までは真つ直ぐ一本道なんだからハンドルをじつと持つていればいい。まわす必要はない。

男 オレもそう言おうとしたんだ。

女 朝日が見える頃には着くはず。

男 ジやあまずは車の鍵だ。あいつだな。

男 どこにいるの。

女 いま踊つてる。

男 パーティー？

女 さつきあの新人の女と踊つていたから冷やかしてやつたんだ。

男 わたしが行く。

男 あんたが？

女 あなたはタイヤを直して車輪止めもね、外すの忘れないで。

男 車輪止め。

男 それから電線。

女 電気と電話線が引き込んであるでしょ。いつしょに連れてはいけないんだから。（部屋の片隅を指して）この裏にある。

男 知つてるよ。

男 最後に大きな花火が上がつたらパーティーはお開きになる。  
女 もうすぐか。

二人は窓の外を見ている。

女 なにしてんの。修理は今やればいいじゃない。タイヤはパーティーと関係ないでしょ。

男 あのブドウ。

女 なのに。

留守

男 あれも食べたいと思つてたんだ。けどりんごやバナナと違つてブドウは……食べにくい。手がベトベトになるし汁が服に着く。カバンに入れとくわけにもいかない。

女 潰れちゃうからね。

男 あきらめるしかないと思つてた。けどこの部屋ごと行くなら。

女 港についたらここでゆっくり食べるといい。

男 あれ？ けどどうしてオレはあんたと一緒に行くことになつてるんだ。別にそうすると決めたわけじやない。

女 だつたら好きにすれば。あなたが見渡す限りの荒野を一人歩いていくのを誰も止めはしない。

男 そもそもクビになるとは

女 クビでしょ。

男 ……。

女 不安なの？

男 そんなんじやない。

女 どちらにしても自分で考えて自分で決めなきやいけない。

男 そうだ。

女 わたしは一人で何も無い荒野に取り残されるのはイヤ。

男 失敗したら？ 車の鍵を奪えなかつたり、タイヤの修理が思つたより難しかつたり、

女 だつたら帰る客を捕まえて……

男 誰も乗つけてくれないかもしねれない。

女 その時は……

男 うん。

女 その時によるのよ。

男 ……。

女 不安なの？

男 そんなんじやない。

女 どちらにしても自分で考えて自分で決めなきやいけない。

男 そうだ。

女 わたしは一人で何も無い荒野に取り残されるのはイヤ。

歓声が聞こえる。

女 だつたら好きにすれば。あなたが見渡す限りの荒野を一人歩いていくのを誰も止めはしない。

男 そもそもクビになるとは

女 クビでしょ。

男 ……。

女 行きましょう。

男 二人は立ち上がる。

女 分かってる。

男 青いズボンにサスペンダーをつけて、いまどきの茶色の帽子と

女 短い沈黙。

男 この部屋を出ればあとは自分たちでなんとかするしかない。

女 今までそうだつたのよ。忘れてただけ。

男 男は出ていく。女も出ようとしたとき電話が鳴る。女は振り向き

女 電話を一瞥するが近づくことなく部屋を出る。

男 間もなく電話の音は明かりとともにプツリと消える。

女 無人の部屋には月明かりと外の花火の音が射している。

男 オレが頼りだつてことなんだな。  
女 ……。

男 花火が上がり始める。

女 行きましょう。

男 オレが頼りだつてことなんだな。